公益財団法人日本陸上競技連盟
陸上競技研究紀要
第17巻, 267-270, 2021
Bulletin of Studies
in Athletics of JAAF
Vol.17,267-270,2021

第5回 IAAF 世界リレー大会帯同報告

田原圭太郎
多摩総合医療センター　整形外科

1．はじめに

第5回 IAAF 世界リレー大会は 2021 年 5 月 1 日～5 月 2 日の日程でポーランドにおいて行われた．この大会のオリンピック種目に関しては同年 7 月の東京オリンピックへの出場権を獲得することができるため，非常に重要な大会であった．しかし，コロナ禍における海外競技会への選手団の派遣であり，また帰国後には 2 週間の隔離措置がとられるというこれまでに経験のない帯同であった。4 月 27 日に成田空港に集合し，同日に PCR 検査を受け，陰性を確認後に渡航した．男子マイルチームは 4 月 24 日に集合し PCR 検査を受け，4 月 25 日に渡航という日程であった．渡航から試合までの日程も短く，コンディションの調整も容易ではなかった．

選手団はスタッフ 12 名，選手 22 名（男子 11 名・女子 11 名）の総勢 34 名で結成され，その内メディカルサポートとしては医師 1 名トレーナー 2 名が帯同した．

2．派遣前準備

事前に選手へメディカルアンケートを送付し，選手のコンディショニングの状況や怪我の有無，内服薬やサプリメントなどのチェックを行った．選手から申告されたサプリメントに関しては医事委員会のスポーツファーマシスト 3 名の協力を頂き，アンチ・ドーピングに関する安全性について調べた内容と伴にサプリメント摂取の基本 8 ケ条を添付して選手へメールし情報提供を行った．

4 月 21 日にオンラインで全体ミーティングを行った．一般的なコロナ対策（手洗い，うがい，マスク着用，ソーシャルディスタンス，体調管理）を再度徹底するよう確認を行った．さらに，マスクなしでの会話は避けるよう指導し，特に食事中のマスクなしの会話については行わないよう強調した．

大会側の新型コロナ対策として示された Medical Clearance Protocol には全体的なルールとポーランド渡航前から入国までの注意点，滞在中の検査方法，Covid-19 検査陽性の場合の取り扱い，ポーランド滞在中のホテルやトレーニング施設・競技会での注意点，ポーランド出国における留意点が記載されていた．代表的なものを以下に紹介する．食事やトレーニング・競技以外でのマスクの着用，マスクはサージカルマスクまたは N95 マスク・FFP-2 マスクが推奨されていた．また，世界陸連より個人へメールが届き，出国 48 時間以内の PCR 検査での陰性証明書を写真で添付し送ることも求められた．大会期間中，PCR 検査は RT-LAMP 法で行われることや，入村前とその後 48 時間毎に 1 回ホテル内に設置され

写真①　Full PPE の検査員

写真②　支給された新型コロナ感染対策の FFP-2 マスクや消毒用品

写真③　新型コロナ感染対策のため食事は従業員が盛り付けを行った

写真④　テーブルや椅子の配置も新型コロナ感染対策がとられた

た PCR 検査室において行われること，検査を受けなければ AD カードが失効されることが明示されていた．PCR 検査が陽性であった場合のホテルでの同室者に対する対応や PCR 陽性者は 10 日間隔離されることも記載されていた．

３．渡航および現地の状況

派遣期間は新型コロナの流行が収まっておらず，特にヨーロッパでは日本より感染状況が悪く，ポーランド（人口約 3800 万人）でも 4 月後半で 1 日平均 6000 ～ 7000 人の感染が確認されていた．約 1 か月前の 3 月後半～ 4 月の感染状況は 1 日平均 25000 人を超えており，その時期よりは落ち着いてきていたとはいえ，日本の感染状況より厳しい状況であった．そのため，大会はバブル形式で開催され，ホテルと競技場以外へ出ることは禁止された．

新型コロナ（SARS-CoV-2）の PCR 検査は，日本出国時とポーランド到着後競技会の会場横にある PCR 検査の Main Testing Centre で行い，その後は 48 時間に 1 回ホテル内に設置された PCR 検査室において全て鼻咽頭で行われた．Main Testing Centre で行われた PCR 検査の採取の検査員は，写真①のような full PPE（personal protective equipment）であった．幸い日本選手団は選手・スタッフ全員がすべての検査で陰性であった．

空港からは用意されたバスで移動したが，その車内で FFP-2 マスク・小さなボトルに入った手指消毒液・アルコール手拭いが入った袋が 1 人につき 1 個ずつ配られ，以後その指定の FFP-2 マスクを着用するよう指示があった（写真②）．FFP-2 マスクは 1 枚 / 日使用できるくらい用意されていた．大会では

写真⑤　部屋は２人部屋で同室者は濃厚接触者として扱われた

全選手・スタッフが同じ FFP-2 マスクを着用していた．

ホテルには手指消毒用の器械が様々なところに設置されていた．食事はビュッフェスタイルであったが，新型コロナ対策で従業員がお皿に盛りつけて渡される形式であった（写真③）．また，テーブルや椅子の設置はソーシャルディスタンスが保たれ座席は対角になるよう設置されていた（写真④）．部屋は２人部屋であり，同室者は濃厚接触者として扱われるということが Medical Clearance Protocol に記載されていた（写真⑤）．ホテルの従業員も大会前から大会期間中は同じバブルに入り，同じホテルに宿泊しているとのことであった．ホテルはドイツやケニアなど数ヶ国と同じホテルであった．

サブグラウンドの自国のテント内にも手指消毒のボトルが置いてあり，競技場の待合いなどにも手指消毒の器械やボトルが設置されていた．サブグラウンドは選手・スタッフが密集するほど狭くはなかったが，トレーニング中はマスク着用しなくてもよいとされており，短時間ではあるがマスクなしで話したりする場面があった．陽気な国の選手が選手全員でほぼマスクなしで歌を歌っていたりしていて，国によっては新型コロナ感染症への危機感の薄さが感じられた．（話はそれるが，飛行機内で一緒になった他国の選手やスタッフがマスクなしで会話をしている場面を度々目撃し，添乗員に注意されている場面もあった．）

ポーランドの４月下旬～５月上旬は日中でもまだ少し肌寒く，競技会は夜に行われたため気温は5℃程度で風もあったため，競技中の気候はとても寒い状況であった．

４．医療活動

＜整形外科＞

大会期間中のポーランドでの整形外科的なサポートとしては，ハムストリング肉ばなれ１名，両腓腹筋の筋痙攣１名に対応した．また，以前から抱えているハムストリング肉ばなれ後，膝蓋腱炎，アキレス腱炎，遠位橈尺関節挫傷後などの状況確認も行った．

帰国後の隔離期間はハムストリング肉ばなれの疑いがある選手に検査も含め対応し，その他は前記に加え，ハムストリング起始腱障害，足関節痛（足根洞症候群疑い＋前脛骨筋・足趾伸筋の腱鞘炎疑い），腰痛などの状況確認や対応を行った．

今回の期間中に起こった急性外傷で検査が必要な場合は JISS クリニックへの受診が可能であることを渡航前に確認していたが，今回の遠征に関してはテストイベントも含まれていたため JISS クリニックはもとより，ハイパフォーマンススポーツセンター（HPSC），東京オリンピック・パラリンピック組織委員会，内閣官房への許可を得た上で受診をしなければならず，煩雑な手続きが必要であった．

＜内科＞

ポーランドでの大会期間中，２名の選手に体調不良がでた．１名は頭痛と嘔気，お腹が緩いという症状もあった．体温は 37.0℃であったため，大会側に報告し同室者と共に PCR 検査を行い，結果は陰性であった．お腹がゆるいのは硬水による影響であったようで，頭痛や微熱は月経開始日であったこと，体温計測が運動後であったことが考えられた．翌日より症状も改善し，特に問題なかった．もう１名は咽頭痛と軽い咳があり診察時体温 37.0℃であった．咽頭は軽度発赤していた．この選手も同室者と共に PCR 検査を行い，結果は陰性であった．PL 顆粒とメジコン，イソジンガーグルを処方した．症状は徐々に改善し，その後も特に問題なかった．両選手とも LOC より食事は他の選手と同じで構わないということであったので，行動に関しては選手団と一緒に行動した．

５．ドーピングコントロール

２名の選手がドーピング検査を指示され，検査を行った．その他に，男女混合マイルリレーで日本新記録を樹立したため，ドーピングコントロールを申請し検査を行った．

６．成績

男子４×400mリレー，女子４×100mリレーは予選を突破し，東京オリンピック出場権を獲得した．男子４×400mリレーは銀メダル，男子４×100mリレーは銅メダルを獲得した．

７．帰国後の隔離期間中の活動について

５月４日に帰国，翌日の５日より２週間の隔離生活が開始となった．帰国の際は解熱鎮痛剤の内服を行っている場合にはその申告が必要であり，手続きに関しても誰もが初めてのことで不安が多かった．帰国後は決められたアプリで健康報告や居場所情報の報告を行った．生活に関しては，１日１回NTC陸上トレーニング場でトレーニングが出来るものの，その他はホテルで隔離生活を送った．ホテルは一人一部屋での生活であった．食事はお弁当を各自の部屋で食べ，朝はホテルの弁当で，昼と夕の献立は陸連の栄養部の栄養士が確認しNTCのさくらダイニングで調理して頂いたものであった．期間中に大きなケガや病気の発生はなかったが，ハムストリング肉ばなれ疑いと熱中症になった選手がいた．ハムストリング肉ばなれが疑われた選手への対応は，所定の手続きを行い国立スポーツ科学センター（JISS）内のクリニックを受診しMRIを撮像した．熱中症の選手への対応は，日曜日の練習中に発症したためJISSは休みで受診できず，医療機関への受診に迷ったが，水分の経口摂取は可能であったため，経過を診ることができた．しかしながら，医療機関受診が必要か悩ましい状況で，受け入れ可能な医療機関を探すことはかなり大変であることが容易に考えられた．また，スタッフに内科や耳鼻科・眼科などの症状が出ることもあり，同様に医療機関受診が必要な状況か判断に迷うこともあった．ケガなどが起こった場合，JISSクリニックへの受診が可能であることを渡航前に確認はしていたが，隔離期間中にテストイベントへの参加もあり，JISSクリニック受診には東京オリンピックの組織員会や内閣官房などの行政への確認も必要であった．また，JISSクリニックでは対応できない疾患については，対応してもらえる病院を見つけなければならず，隔離期間中の医療機関への受診はかなりハードルが高いものであり，この隔離された２週間は十分なバックアップ体制がない中で毎日当直をしている気分でとてもストレスを感じて過ごしていた．コロナ禍で世界や日本の医療も含めた社会の状況が日々変化し，国際大会が開催されるかどうかも不透明で，かつ参加も可能かどうか分からない中で，その準備も慌ただしく行われたため，バックアップが可能な医療機関の検討や受け入れの事前交渉など，十分な準備が出来なかった．コロナ禍での国際大会帯同の際の今後の課題と考えられる．

８．まとめ

コロナ禍で初の国際競技会への遠征であったが，トレーナーのお二人をはじめ，スタッフの皆様と協力し大きな事故なく新型コロナに関しても大きな問題なく終了することができた．コロナ禍の国際競技会遠征に関しては，帰国後の隔離期間中の対応も含め，今回の経験を踏まえて今後につなげていけるよう情報共有していきたいと考える．